クラブチーム練習訪問①

つくば中央リトルシニア

野球との接点に選択肢を！ 時代に求められるクラブの形

小学生を対象にした野球教室を行っていた「つくばベースボールクラブ」に端を発したチームは今年、設立10年目を迎える。子どもたちのニーズに合わせて野球をプレーする環境を整え続けることが組織の発展につながっている。

取材・文／菊池仁志　写真／BBM

TEAM DATA
代表・監督：堀田哲也
コーチ：坂本皓平／塚田直樹／塚崎陽介／渡辺大雅／野口峻矢／川上智
マネジャー：小松代芳依
グラウンド：〈週末練習〉茎崎高校グラウンド（茨城県つくば市茎崎447-8）
〈平日練習〉専用グラウンド（茨城県つくば市谷田部）
創部：2010年
部員数：83人（3年22人、2年30人、1年31人）
活動日：基本的に土日、平日は自由参加
HP：http://tsukuba-baseballclub.jp/team/

野球とのかかわりの多様性を認める

インターネットのインフラを基盤にして、絶えず新たなイノベーションが生み出される社会で、先の将来に訪れると考えられていた「VUCA」と言われる変動的（Volatility）で、不確実性（Uncertainty）に富み、複雑さ（Complexity）が混在する曖昧な（Ambiguity）時代も、新型コロナウイルスの猛威とともに目の前に現実となって現れた。

そうした社会では、ものすごい勢いで起こる変化を敏感に感じ取り、そこに見いだされる課題を的確にとらえ、その解決を創造する能力が求められる。個人も組織も、それまでのやり方を踏襲し続けるだけでは、変化に取り残され、生き残っていくことが難しい。そのような中で、果たして野球は、時代に必要とされるものとして、あり続けることができるだろうか――。

つくば中央リトルシニアは、2010年、つくばベースボールクラブが行っていた小学生を対象とした野球教室に通っていた子どもの競技継続の場として発足して今年で10年目。チームの代表を務める堀田哲也監督は、ジュニア世代の野球が抱える課題を俯瞰的にとらえ、あらゆる方策を実行しながら組織をより良い方向に導いてきた。

現在はつくば中央リトルシニアの活動に加え、小学生の野球体験の場としてのつくばフューチャーズの運営、平日放課後のグラウンド開放事業やバッティングスクールを通じて、野球競技普及モデルの構築を目指している。

「ここ10年、野球人口がどんどん減ってきている中、普及活動は全国的にいろいろな組織が行っています。そこで『野球が楽しい』と感じる子どもはたくさんいるはずです。ただ、そこでいざ『チームに入ろう』と思ったときに、あまりに指導が厳し過ぎたり、高度な技術を求められたりするチームばかりだったら、楽しく野球を継続できる子どもはほんのひと握りです。そのため、普及とその“受け皿”はセットで考えていく必要があると思っています」

毎週土曜日に行っているフューチャーズの活動。90分ほどでキャッチボールやティーボールなどで野球の基本的な動作やルールを覚える内容を提供している

中学校では文部科学省による「部活動ガイドライン」や教師の「働き方改革」が推進される中で、部活動が縮小傾向にある。今後、野球部が活動していない中学校もますます増えていくと予想され、硬式クラブチームはそうした選手たちの受け皿としての役割も担っていくことになるだろう。ただ、そうした選手を受け入れる側が、野球に本気度と膨大な時間を注ぐことを求めるチームばかりだと、それに応じられない選手の行き場がなくなってしまう。

野球はしたいけど「体が小さいから大丈夫かな？」「勉強をする時間がなくなるのでは？」と不安を抱える選手がいるのも当然で、そうした選手たちのために「選択肢を与えたい」と考えているのがチームの立場だ。

「野球がうまくなること、試合に勝つこと、野球で進学を目指すことなど、結果を第一の目的に活動しているチームを否定するわけではありません。しかし、そうしたチームばかりでは、チームになじめない選手が多く生まれて、野球自体が行き詰まってしまいます。今のウチのチームには4人、このチームに入って野球を始めた子がいます。どの年代でも、気軽に野球を始められるという環境はなくてはならないものです」

野球に求めるものは、一人ひとり違っていい。その多様性を認め合い、仲間への思いやりを持てるチームを目指している。現チームには3学年で83人が所属。徐々に遠方から通ってくる選手も増え、昨年からはグラウンド周辺の駅を循環するマイクロバスによる送迎も開始した。

また、土曜日の午前中に行っている小学生を対象にしたつくばフューチャーズの活動も活況だ。「普及」と「育成」を目的に、野球を始めたばかりの子どもたちに楽しくルールを覚えてもらうための機会として、ティーボールなどを行うもので、約20人の小学生が毎週楽しそうにボールを追っている。

「中学生で自宅の近くのチームではなく、わざわざ遠方のウチを選ぶ選手がいるのも、選択肢が必要であることを証明しています。そしてフューチャーズも、グラウンド開放も、バッティングスクールも、子どもが野球とのかかわりを持つ選択肢を与えるものとして行っているものです。もっと野球がやりたくなったら学童チームに入ってやってもらえばいいと思っています。また、中学生の中には学校の部活動との両立をしている選手もいます。卓球部やバスケットボール部に所属して活動しながら、こちらの野球にも来られるときには来る。どちらを選ぶかというときも、その選手が選択すればいいのではないでしょうか」

1981年生まれの堀田監督は、高岡南高、関西大を通じて野球をプレー。大学卒業後は筑波大の大学院に進み、院生コーチとして硬式野球部の指導に携わった。その後、つくばベースボールクラブを立ち上げ、野球教室の事業化を進めているさなかに、野球が持つ課題に直面したのが、現在のチームの体制につながっている。

「野球教室を実際にやってみると、学童チームに入っている子も、そうでない子も参加してくれました。チームに入っていない子に『何でチームに入らないの？』と聞いていくと、野球が持つ問題点が浮き彫りになってきたんです。野球をやるハードルを下げる必要があると感じました」

最近になり子どもの野球離れが大きく取り上げられる中で、その要因と考えられている保護者の負担を取り除くチームも増えてきているが、堀田監督がその後、立ち上げたつくば中央リトルシニアでは、いち早くその点に着手した。設立当初から保護者の当番制を設けず、その後は金銭的負担を強いるチームシャツやキャップなどの保護者の購入物をなくし、休日に昼食を挟んでの活動になる場合には、希望者にお弁当を注文する制度を導入した。練習時間も短縮し、選手が個人の時間、家族との時間を十分に持てるように配慮している。

選手の主体性を守る指導者の姿勢

選手を温かく見守る堀田監督をはじめとした指導陣が選手と接する姿は、「主体性、創造力、思いやりを育む」というチームの指導方針を体現している。堀田監督は「野球のプレーに対して、打てないことや捕れないことなどに怒ることはしなくなりました。野球がうまいことが偉いことでは決してない。うまくいかなくても一生懸命取り組んでいることを認めるチームでありたい」と言い、チー

チームの主な活動場所である茎崎高校グラウンド。また、打撃ケージやブルペン、天然芝を敷いた内野スペースなどがある専用グラウンドがあり、これらは県のグラウンド開放事業の協力を得ている

主体性を育むというチームの指導方針で、指導者が多く口を挟むことはなく、選手同士で話し合う機会も多い

ムのルールや基準、または野球に取り組む姿勢についても、事実をフィードバックすることはあっても、それについての良し悪しを押しつけることはしない。

「例えば、真剣に練習している子の横では、ふざけ合っている子がいるということもあって、そこにはコーチにもいろんな感情があると思うんです。でも、『今、一生懸命練習している子がいるんだよ』と伝えることはあっても、そのことが『良い』『悪い』ということは子どもたちには言わない。私は今、38歳になってそういう姿勢でいることができるようになってきましたけど、若いコーチたちが子どもたちの行動を黙って見守っている、それがすごいと思います。子どもたちが主体的な行動が取れるように成長しているのであれば、そうしたコーチの姿勢に尽きると感じます」

行動の発端となる動機付けには、「外発的動機付け」と「内発的動機付け」があり、外発的動機付けによる行動は目標を得るための「手段」、内発的動機付けによる行動はそれ自体が「目標」と位置付けることができる。これを、野球に置き換えると、選手が野球に取り組む理由が「コーチに怒られたくないから」「野球をプレーしてほしいと望む親の期待に応えたいから」というように、行動の結果として目標をかなえようとするのが外発的動機付け、「野球をすること自体が楽しい」「野球がうまくなることがうれしい」というように行動と目標がイコールで結ばれているのが内発的動機付けだ。つまり、野球が手段化している限り、選手の主体性が育まれることはない。

「主体性を育むには選手にとって失敗を恐れずにチャレンジできる環境が大事です。『こうしなさい』『こうあるべき』という指導が日常になると、子どもたちは言われたことしかやらない、指示待ちの姿勢になってしまいます。野球はそういう子どもをたくさん生み出してきました」

社会で言えば、かつて上司や先輩の指示に忠実に従うことが美徳とされてきた時代があった。膨大な業務を押しつけられても、気合と根性で乗り越える精神力こそ必要なものだった。野球はそうした素養を育むツールとして存在してきた。しかし、時代が変わった今、野球が果たしてきた人間教育の成果のすべてが否定されるわけではないけれども、「創造」を求められる現代社会では、課題を自分事としてとらえ解決していく姿勢が求められる。主体的に行動せずして価値を創造できない社会で、野球の現場だけが取り残されていることが競技の普及が滞っている要因にもなっている。

「野球は複雑な競技性もあり、いろんな学びを得られる教材です。野球のプラス面を認識してもらいたいですね」

「主体性を育むには選手にとって失敗を恐れずにチャレンジできる環境が大事」（堀田監督）

堀田監督が危惧するのは、野球がスポーツの主体を見失ってしまっているもののように感じることだ。かつての自身にも覚えがある。2015年、４期生にあたる代がチーム初の関東大会に出場した。

「野球がうまいメンバーがそろっていて、勝たなきゃいけないと思ってやっていました。厳しく指導しても、負けん気が強い選手が多かったこともあり、なおさら押しつける指導の要素が強くなっていました。その感覚で５期生、６期生にはいつも怒ってばかりだったのですが、そのうちに、チームをやめるという子どもが出てきてしまいました」

チームの立ち上げのときから「野球の普及のため」という理念は一貫してきたはずだった。しかし、「勝つことによって、いい気になって、自分だけ変わってしまいました」と当時を振り返る。チームのホームページに「17年１月中学生　方針見直し・転換」と明記するのは、自分への戒めだろう。主体は選手にあることを肝に銘じている。

Enjoy Baseball実践のためのスポーツマンシップの理解

チームが目指すのは、チームメート全員がベストを尽くし、仲間への思いやりを大切にして多様性を認め合い、創意工夫して自発的に努力する「Enjoy Baseball」を実践すること。そのために「スポーツマンシップ」の重要性は、選手にも保護者にも伝えていることだ。

スポーツを構成するプレーヤー（相手、仲間）、ルール、審判への「尊重」、自ら責任を持って決断・行動・挑戦する「勇気」、勝利を目指して自ら全力を尽くして楽しむ「覚悟」が伴わなければ、真の「Enjoy Baseball」は成り立たない。

「子どもたち自らが『Enjoy Baseball』を実行するために『スポーツマンシップ』を理解する。スポーツの主体は選手であるという本来のあるべき姿でいたいという思いで、この２つを伝えています。そしてこの考え方を元に、指導者、選手、保護者が『スポーツとは何か』を認識していることが重要だと思います」

かつては、平等を貫くために保護者とのコミュニケーションに一線を引いてきた。「グラウンドに頻繁に顔を出す保護者とだけ関係ができて、それが試合に出場する選手の選別や采配に影響していると思われないようにするため」で、それもひいては「選手のため」だと考えていたが、現在はコミュニケーションをはばかることもなくなった。勝たなければ次がないトーナメントで行われる公式戦こそ例外だが、野球をやりたいという選手、保護者の思いを尊重し、練習試合は全員が出場することをチームの決め事とし、また、チーム内でのリーグ戦を行い、全選手に平等な機会を設けている。それをチームの方針として隠さず開示しているからだ。

「元来、少年野球の指導は、地域の方々のボランティアで成り立ってきました。しかし、たとえボランティアであっても、指導法が理不尽だったりして保護者のニーズに応えられなければ不満につながりますし、それはチームがうまくいかなくなる理由になります。それが進めばチームが分裂してしまいかねません。ただそれらは、大人の都合であって、一番に考えないといけないのは、子どもたちの環境をどう整えるかということです」

クラブチームとして、採算面でも独立した運営を目指しているのも、責任を持った指導を恒久的に続けていくためであり、それがひいては野球競技普及につながるものと考えている。従来のチームの形にとらわれず、時代の求めに応じながら、つくば中央リトルシニアの体制は進化を続けていく。

堀田監督（右）と第1期生で現在は指導にかかわる坂本コーチ。「チームの方針を身をもって理解している」とほかの5人のコーチもチームのOB

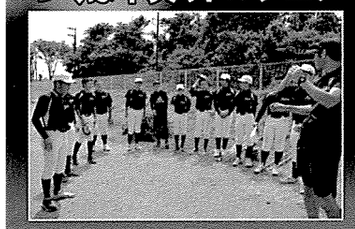
ベースボール・クリニック10月号別冊付録　ベースボール・マガジン社　令和2年9月17日発行・発売（毎月17日発行・発売）　第31巻第10号通算375号

中学硬式野球Clinic

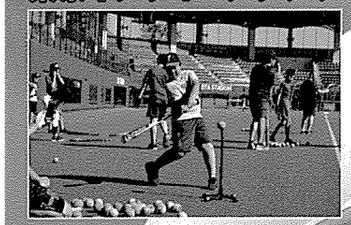
Baseball Clinic
◉ベースボール・クリニック

クラブチームの最新組織論
選手、指導者、保護者、地域を幸せにするコーチングメソッド
松井克典
◎日本工業大准教授

チーム訪問❶
つくば中央リトルシニア



チーム訪問❷
東京インディペンデンツ



元大学日本代表監督
チーム設立の理念
横井人輝監督
◎SKポニー

SPECIAL INTERVIEW
山本由伸
［オリックス投手］
「野球を楽しむ気持ちが大切」

成長期選手の投球障害予防のための
セルフチェック＆コンディショニング
元脇周也
◎Beyond the frame 代表

コーチングのヒント満載！　別冊付録「中学硬式野球CLINIC」

令和2年9月17日発行・発売（毎月17日発行・発売）
第31巻 第10号 通算375号
平成2年6月16日第三種郵便物認可

Baseball Clinic
◉ベースボール・クリニック

Bs 山本由伸インタビュー
別冊付録
「中学硬式野球Clinic」

一流打者の打撃フォームをタイプ別に解説！
◆鴻江理論の実践［打撃編］
鴻江寿治
◉アスリート・コンサルタント
◆Player's Advice
廣本拓也
◉日本生命内野手
◆わがチームの練習風景
室井洋一
◉那須拓陽高監督

特集
最大成果の追求
打撃スタイル考察

［捕手の役割］◆ゲームマネジメント
和田照茂
◉ベースボール・コンサルタント
◆連続写真解説
［投手編］
松本隆之介 ◉横浜高
［打者編］
山村崇嘉 ◉東海大相模高
◆フィジカルトレーニングの新理論
川島浩史 ◉U-12日本代表アスレティックトレーナー

10 OCTOBER 2020
ベースボール・マガジン社発行